

# 福岡環境学際フォーラムの 2011年度の活動

小 出 秀 雄<sup>1</sup>

## 1. はじめに

本稿は、「国公立大コンソーシアム・福岡」（以下、コンソーシアム・福岡と略す）<sup>2</sup>の共同研究事業をきっかけに交流を深めてきた環境問題の研究者が<sup>3</sup>2011（平成23）年4月1日に立ち上げた<sup>3</sup>、「福岡環境学際フォーラム」（Fukuoka Interdisciplinary Forum for Environmental Problems, FIFEP）の活動を紹介するものである。

本フォーラムの活動内容の公開や日常的な情報共有は、ブログ〈<http://fukuokagakusai.seesaa.net/>〉やメーリングリスト（ML）〈<http://www.mlist.ne.jp/usr/fukuokagakusai/>〉を活用している。本稿は、紙媒体にその記録を残すことを目的としている。

## 2. 前年度の「資源循環フォーラム」〜次へのステップ

前述のコンソーシアム・福岡は、文部科学省の「平成20年度戦略的大学連携支援事業」<sup>4</sup>に採択されたのを契機に、環境・エネルギー問題をテーマとする4大学間<sup>5</sup>の教

---

1 西南学院大学経済学部経済学科教授、福岡環境学際フォーラム運営代表。本稿を作成するにあたって、平成23年度科学研究費補助金・基盤研究(C)「最終処分場の社会的枯渇が廃棄物処理システムの環境・経済的効率性に及ぼす影響」（研究代表者：九州大学工学研究院・中山裕文准教授）および科学研究助成事業（学術研究助成基金助成金）・若手研究(B)「レアメタルの回収効率性に関する実態調査とモデル分析」による支援を活用した。この場を借りて御礼申し上げます。また、本フォーラム研究会での報告資料（ppt, pdf）の引用を快諾してくださったすべての報告者に、深く感謝申し上げます。

2 <http://www.consortium-fukuoka.jp/>

3 本稿では、固有名詞の一部として元号が用いられている場合以外は、西暦で表記している。

育連携，研究連携，地域貢献，ガバナンス（資源共有）の4つの事業を柱に，さまざまな活動を実施してきた。支援事業の終了に伴い，2011年度よりコンソーシアム・福岡は自主運営に移行したが，各校がアイデアを出し合い，さらなる展開を試みている。

上記の研究連携に関しては，2009年度と2010年度に，研究助成事業を実施した。これは，書類審査の結果採択された共同研究プロジェクトと研究会に対して，コンソーシアムの予算から研究費を支援するという取り組みであった。その研究成果は随時，個別の学会発表や論文発表，あるいはコンソーシアム主催の市民公開講座やオムニバス授業といった形で披露されている。

筆者も研究代表者として，2009年度は7名の研究プロジェクトである「資源循環・低炭素型都市づくりの学際研究：福岡市と釜山広域市を中心に」を，そして2010年度は，10名の研究会である「九州と東アジアの都市をつなぐ資源循環の学際的検討フォーラム」（以下，資源循環フォーラムと略す）を遂行した。前者については，すでに小出（2010a，2010b）に詳しい記録を残している。ここでは，後者について簡単に紹介する<sup>6</sup>。

2010年度の研究助成事業に採択された資源循環フォーラムは，表1に示すように，所属や専門分野が多岐に及ぶ10名のメンバーにより構成された研究会である。このフォーラムでは，地域や都市を結ぶ国際的な資源循環をテーマに，それを取り巻く経済とビジネスの動向，廃棄物処理・リサイクル技術の態勢，法律と条約の変遷，インフラと流通の整備状況などを，外部の有識者（報告者）を交えながら議論した。

図1は，フォーラム内部での各人の役割分担を示しているが，自身の専門分野を良い意味で「超越」した議論を日常的に交わすことによって，全体としてのまとまりのみならず，メンバー間でさまざまな形での協調関係が生まれることとなった<sup>7</sup>。

前述のように，資源循環フォーラムは「研究会」としての事業であったため，会合をたびたび開催することを重視していた。年度末までに，計5回のフォーラム<sup>8</sup>（＝研究会，写真1）に加えて，学生を中心とした施設見学会<sup>9</sup>（写真2），メンバー8名に

4 ちなみに，2009年度には本事業の名称が，「大学教育充実のための戦略的学際連携支援プログラム」に変更された（[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/kaikaku/senryaku2.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/senryaku2.htm)）。

5 福岡工業大学（代表校），九州大学，福岡女子大学，西南学院大学。

6 以下，コンソーシアム・福岡発行の「News Letter」No.4（2011年3月，小出代表執筆）より抜粋する。なお，資源循環フォーラムの活動記録は，フォーラム発足当初からブログ（<http://junkanforum.seesaa.net/>）で公開している。

表1 資源循環フォーラム（2010年度）のメンバー

氏名	フリガナ	所属	職位	専門
小出 秀雄	コイデ・ヒデオ	西南学院大学経済学部	教授	環境経済学, 環境政策
岡 重男	オカ・シゲオ	(社)福岡県産業廃棄物協会	事務局員	廃棄物工学
勢一 智子	セイイチ・トモコ	西南学院大学法学部	教授	行政法, 環境法
田村 一軌	タムラ・カズキ	(財)福岡アジア都市研究所	研究主査	都市地域計画, ネットワーク解析ほか
鄭 雨宗	チョン・ウジョン	福岡工業大学社会環境学部	准教授	環境経済学, 地球温暖化政策
中山 裕文	ナカヤマ・ヒロフミ	九州大学工学研究院	准教授	環境システム工学, 廃棄物工学
松田晋太郎	マツダ・シントロウ	環境テクノス(株) 企画開発部	主任研究員	廃棄物管理, バイオマス利活用
諸賀 加奈	モロガ・カナ	九州大学炭素資源国際教育 研究センター	学術研究員	環境経済学, 経済成長論
楊 氷	ヤン・ビン	西日本技術開発(株) 施設開発・道路部	主任	廃棄物処理
渡邊 智明	ワタナベ・トモアキ	九州大学法学研究院	協力研究員	国際政治・政治学, 環境政治

(注) 所属および職位は当時のもの。

よる1泊2日の視察研修会<sup>10</sup>(写真3), 6名の講演者を招待しての「第2回資源循環に関する研究交流会」(2011年2月25日, 西南コミュニティーセンター)<sup>11</sup>(写真4)を開催した。

7 あくまで筆者の関わった、あるいは現在関わっている範囲でいえば、2010年度における福岡県のレアメタル回収事業研究会、福岡県と日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア経済研究所の「東アジア経済統合と福岡地域の発展」に関する連携研究会、菊池環境保全組合立環境工場の包括管理業務委託評価審査会(における学識経験者)、および2011年度における福岡県のレアメタルリサイクル産学官連絡会議、福岡県産業廃棄物協会の中小企業組合等活路開拓事業委員会、福岡市の事業系ごみ資源化推進ファンド運営委員会などへの関与は、このような研究ネットワークの形成がもたらしめている効果である。また、お互いの所属での講義や研究報告も、日常的に行われている。

8 第1回は7月24日, 第2回は9月25日, 第3回は11月20日, 第4回は12月18日, 第5回は3月18日に開催した。第2回は九州大学西新プラザ, それ以外は西南学院大学(大学院棟, 西南コミュニティーセンター)にて開催した。

9 8月24日に福岡市臨海部の施設(株)寺松商店・博多港物流センターとクリーンパーク・臨海), 8月26日に北九州市の施設(日明工場, ひびき灘開発(株), エコタウン内の工場等)を見学した。

10 9月2日に久留米市の(株)フチガミ, 大牟田エコタウンの大牟田・荒尾RDFセンターと(株)高野環境, 9月3日に熊本市の有価物回収協業組合石坂グループと(有)オー・エス収集センターを視察した。

図1 資源循環フォーラムの実施体制

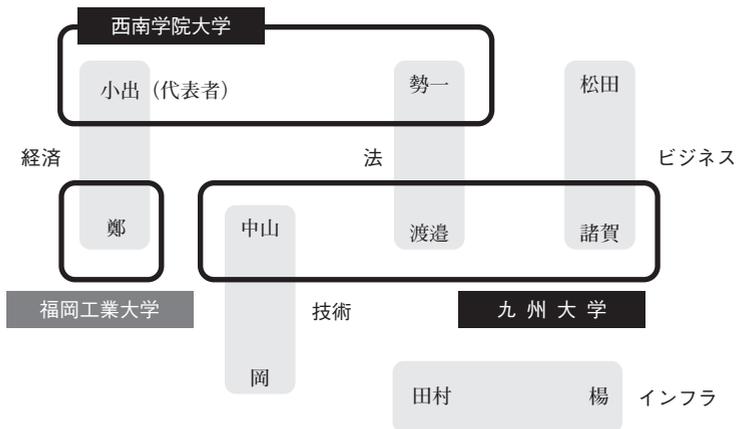


写真1 研究会



写真2 施設見学会



写真3 視察研修会



写真4 研究交流会



また、メンバー全員で論文を執筆するまでには至らなかったが、前年度の研究プロジェクトのメンバー7名で共同論文を発表することができるなど、個人や複数名で関連論文を何本か発表することができた。下記は、研究期間内において、資源循環フォーラムのねらいに関連する刊行論文を列挙したものである（本人から申請があったもののみ）。

- Hideo Koide, “Microeconomic Analysis of Waste Management Policy with Capacity and Response to Landfill,” in *Proceedings of The 8th Expert Meeting on Solid Waste Management in Asia and Pacific Islands*, Ministry of the Environment, Japan, pp.38-45, February 2011.
- 小出秀雄, 「外部性の内部化と拡大生産者責任—一般均衡分析からの含意」, 植田和弘・山川肇編『拡大生産者責任の環境経済学—循環型社会形成にむけて』昭和堂, 203-218頁, 2010年10月。
- Hideo Koide, Tomoko Seiichi, Kazuki Tamura, Woojong Jung, Hirofumi Nakayama, Shintaro Matsuda and Kana Moroga, “Possibility of Cooperation for a Low Carbon Society : Comparison of the Fukuoka and Busan Metropolitan Cities,” *Journal of Novel Carbon Resource Sciences* (Kyushu University), Vol 2, pp.21-35, September 2010.
- 勢一智子, 「ドイツ廃棄物埋立法簡素化令」, 『平成21年度世界各国の環境法制に係る比較法調査報告書』(社)商事法務研究会, 71-93頁, 2010年7月。
- 勢一智子, 「収集運搬業許可取消処分取消請求事件」, 北村喜宣編『産廃判例が解る』環境新聞社, 118-124頁, 2010年5月。
- 桜本光・吉岡完治・和気洋子・巖網林・加茂貝樹・鄭雨宗・王雪萍・吉武惇二・平湯直子, 「中国瀋陽市における小規模植林 CDM の概要」, 『三田商学研究』(慶應義塾大学) 53巻2号, 137-148頁, 2010年6月。

---

11 筆者が資源循環フォーラムの活動内容を紹介したあと、澤田真信氏（環境省九州地方環境事務所廃棄物・リサイクル対策課長）、土谷光重氏（(財)日本環境衛生センター企画事業部企画事業課長）、伊藤雅士郎氏（北九州市立大学法学部政策科学科(学部生)）、藤山淳史氏（北九州市立大学大学院国際環境工学研究科修士課程）、清村浩一氏（(株)ベスト電器経営企画部次長）、寺園淳氏（(独)国立環境研究所循環型社会・廃棄物研究センター国際資源循環研究室長）に講演していただいた（いずれも当時の所属と職位）。各講演の内容については、概要報告書〈<http://junkanforum.seesaa.net/article/192282340.html>〉を参照のこと。なお、第1回の資源循環に関する研究交流会は、2010年2月22日に、当時の共同研究プロジェクトのもとで開催した（詳細は小出(2010a)を参照のこと）。

- 鄭雨宗, 「環境技術移転による経済効果と環境影響分析—日中韓の環境協力体制は可能なのか?—」, 『環境研究発表2011』(福岡工業大学環境科学研究所) Vol. 5, 10-19頁, 2011年3月。
- 澤部咲余・中山裕文・島岡隆行・小出秀雄, 「一般廃棄物最終処分に関わる費用の増減要因に関する一考察」, 『第32回全国都市清掃研究・事例発表会講演論文集』(社)全国都市清掃会議, 111-113頁, 2011年1月。

以上, 2010年度に活動した資源循環フォーラムについて簡単に紹介した。コンソーシアム・福岡の研究会としての助成事業ではあったものの, メンバー間で日頃から積極的に情報交換を行っており, 事業終了とともに縁を切るのは正直「もったいない」レベルに達していた。筆者はほかにこのような研究グループに属していないので, あくまで狭い私見ではあるが, これほど親密にいろいろなことを話し合い, 情報を共有し合えるコミュニティというものは, 珍しいのではないだろうか。

今でもこのような交流がうまくいっている大きな理由として, 各人が取り組んでいる研究分野と手法に対してお互いに敬意を払っていること, 各人の研究成果を理解し議論する過程で新たな視点が生まれること, などが挙げられる。つまり, 「教える人と教わる人」という, いわば上下の関係ではなく, 自分が知らないことを知っている人が(若干物理的距離はあるが)身近に存在して, 気軽に聞いたりお願いしたりできるという, 実に得難いネットワークを構築できたのである。

### 3. 福岡環境学際フォーラムの趣旨

前年度までのこのような経緯を踏まえて, 2011年4月1日, 筆者が運営代表, そして勢一智子氏, 鄭雨宗氏, 中山裕文氏, 松田晋太郎氏, 岡重男氏が運営メンバーとなり, 自主的な研究ネットワークである福岡環境学際フォーラムを立ち上げた。これまで使用してきたキーワードを並べただけの, 何とも工夫のない, そして相変わらず長い名称ではあるが, 「環境」と「学際」を併記している組織名は意外にほかに見当たらないので, これは正しい決定だったと自負している<sup>12</sup>。

本フォーラムの発足当日にインターネットで公表した, 「福岡環境学際フォーラム

---

12 Google と Yahoo! JAPAN でこの2語を AND 検索すると, どちらも約122万件ヒットするが, 上位3つが本フォーラムのサイトである (2012年1月9日時点)。

のご案内【参加者募集】には、以下の活動概要を予定として示した<sup>13</sup>。なお、MLはメーリングリストの略称であり、誰でも自由にメールアドレスの登録および解除が可能である。

- (1) 福岡を拠点に、九州、東アジアにおける環境問題の学際的検討と政策提案。
- (2) 特に、問題解決のために都市間連携、広域連携、国際連携を必要とする分野に着眼。例えば、地球温暖化（低炭素化）対策、越境汚染対策、漂流・漂着ごみ対策、地域循環圏の形成、国際資源循環の適正管理、都市と自然の共生、生態系ネットワークの形成、など。
- (3) 2カ月に1回程度、フォーラム主催の研究会および懇親会を開催（早良区西新近辺）。
- (4) ブログによる活動記録や関連情報の公開。
- (5) ML参加者間での日常的な情報（学会、研究会、見学会、交流会、イベント、ニュースなど）の共有と意見交換。参加対象は大学の教職員・学生、研究機関、行政、企業、各種団体などを想定。文系・理系をはじめとする専門分野の違いは不問。
- (6) ML参加者間での共同研究（論文執筆、外部資金応募など）推進の相談。

表2は、2011年末時点でのML参加者の内訳である。大学関係者（教職員と学生）が19名と、全参加者32名の約6割を占めるが、法学や経済学などの文系、工学などの理系、総合科学（部）や社会環境学（部）などの文理融合系といった、多彩な専門分野の方々が参加されている。

それに加えて、研究機関、行政、社団法人、企業の方々も参加されている点が重要である。現場や実践に基づいた見解が自由に発せられることによって、筆者を含め、とかく内向きになりがちなアカデミズムの人間は大いに知的刺激を享受している。そのような環境の中で、自分（たち）が日々取り組んでいる仕事の意義をあらためて考える機会が増えている。

なお、MLを利用したメールの発信数は、短い返事なども含めて、2011年末時点で150通を超えている。

表2 ML参加状況

	所 属	学 部 等	人 数
大 学	鹿児島大学	法文学部	1
	神奈川大学	経済学部	1
	九州産業大学	経済学部	2
	九州大学	工学研究院	1
		工学部（学生）	1
		コンソーシアム・オフィス	1
		炭素資源国際教育研究センター	1
		法学研究院	1
	西南学院大学	経済学部	1
		商学部	1
		大学院経済学研究科（学生）	1
		法学部	1
	徳島大学	総合科学部	1
	富山大学(元)		1
福岡工業大学	社会環境学部	1	
福岡大学	工学部	1	
北海学園大学	経済学部	1	
山口大学	教育学部	1	
研究機関	(財)国際東アジア研究センター	1	
行 政	福岡県環境部	5	
社団法人	資源循環ネットワーク	1	
	福岡県産業廃棄物協会	1	
企 業	(株)エコテック	1	
	環境テクノス(株)	1	
	西部ガス(株)	2	
	西日本技術開発(株)	1	
合 計		32	

(注) 2011年12月29日時点のML登録状況，所属と学部等は五十音順。

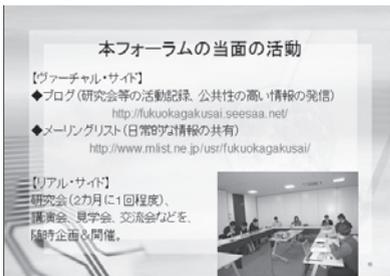
## 4. 研究会

前節の活動概要(3)に掲げた本フォーラム主催の研究会を、2011年度は4回開催することができた。本節では、各研究会の概要を、報告資料(スライド)の抜粋と写真、報告項目とともに紹介する。なお、煩雑を避けるため、この節に限り、図と写真の表記を省略した。

### [1] 第1回研究会

- ・ 日 時：2011年5月21日(土) 15:00~18:00
- ・ 会 場：西南コミュニティーセンター2階会議室
- ・ 出席者：11名(報告者2名以外の所属は、九州産業大学1名、九州大学5名、福岡工業大学1名、福岡県環境部1名、環境テクノス1名)

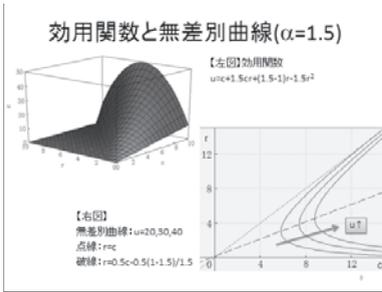
①小出による趣旨説明：「大学間連携から“福岡環境学際フォーラム”への道程」<sup>14</sup>



- ・ 大学間連携→文理融合は可?
- ・ 2009年度の共同研究
- ・ 2010年度の共同研究
- ・ 本フォーラムの当面の活動、課題

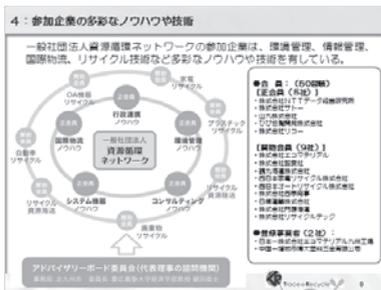
<sup>14</sup> 使用したファイルは、ブログで公開している〈[http://fukuokagakusai.up.seesaa.net/img-ame/110521\\_forum\\_1\\_introkoide.pdf](http://fukuokagakusai.up.seesaa.net/img-ame/110521_forum_1_introkoide.pdf)〉。

②第1 報告：小出秀雄（西南学院大学経済学部）「グッズとバズの連続性を考慮した意思決定モデル」<sup>15</sup>



- ・はじめに～本分析の背景
- ・具体的な効用最大化モデル
- ・結果：比較静学，図解，ごみ処理サービスの需要曲線
- ・政策：ごみ排出量を減らすには，消費・減量比率を高めるには
- ・まとめ～「バズのグッズ化」との関係

③第2 報告：松岡浩史氏（一般社団法人資源循環ネットワーク）「国際資源循環の適正化に向けたトレーサビリティ認証サービス」<sup>16</sup>



15 本研究を進めた形での学会発表を，環境経済・政策学会2011年大会（9月24日，長崎大学文教キャンパス）と廃棄物資源循環学会研究発表会（11月3日，東洋大学白山第二キャンパス）で行った。前者は本号掲載の「グッズとバズの連続性を示す意思決定モデル」，後者は小出（2011）である。

16 <http://www.trace-recycle.or.jp/>

- ・国際資源循環の現状と課題
- ・国際資源循環の適正化に向けた日本の政策
- ・一般社団法人資源循環ネットワーク設立の経緯
- ・参加企業の多彩なノウハウや技術
- ・トレーサビリティ認証サービスの内容
- ・再生処理事業者の審査・登録システム
- ・トレーサビリティ情報管理システム
- ・トレーサビリティ認証サービスの特徴
- ・リサイクルおよびトレーサビリティのフロー
- ・トレーサビリティ情報の提供
- ・再資源化実績報告書の提出
- ・今後の課題
- ・国際資源循環の適正化に向けた提案

## [2] 第2回研究会

- ・日 時：2011年7月16日(土)  
15:00~18:00
- ・会 場：西南コミュニティーセンター  
2階プロジェクトルーム
- ・出席者：15名（報告者2名以外の所属は、九州大学2名、西南学院大学2名、東北大学1名、福岡工業大学1名、福岡大学5名、福岡県産業廃棄物協会1名、環境テクノス1名）

### ①第1報告：鈴木慎也氏（福岡大学工学部）「費用負担の有無がペットボトルのリサイクル行動に与える影響」<sup>17</sup>

- ・研究背景および目的

2.1 研究対象及び方法

### 2.1.5 搬出実態調査

調査日(2010年)  
・9/6, 10/4, 11/1, 12/6

調査項目  
・搬出の有無  
・有料指定袋の重量  
→ばねばかりで計測  
・有料指定袋の容量(45L or 30L)  
・有料指定袋の回収

調査写真

・自宅前に搬出するため、搬出した世帯を特定できる戸籍住宅を対象を限定  
→71世帯(有料指定袋回収のみ・店頭回収を併用を解禁対象に設定)

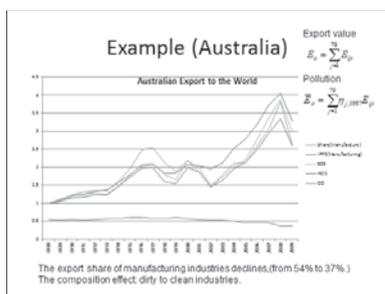
びん投入の袋に対して  
ペットボトルの重量=袋の重さ-びん本数×182g(びん1本当りの平均重量)



<sup>17</sup> 報告資料等の情報は、報告者のホームページ〈<http://www.wtec.21.fukuoka-u.ac.jp/~tc/suiri/ssuzuki-page.html>〉にて公開されている。

- ・ 研究対象および方法
- ・ アンケートによる住民のペットボトルリサイクル行動調査
- ・ 戸建世帯におけるペットボトルの搬出実態調査
- ・ 結論と今後の課題

②第2 報告：本間聡氏（九州産業大学経済学部）“Did International Trade Become Dirtier for Developing Countries?”<sup>18</sup>



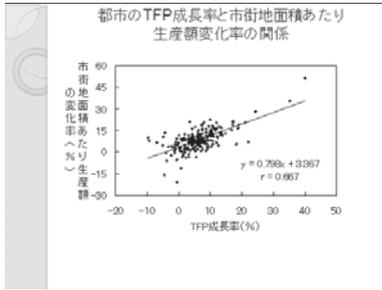
- ・ Background : International trade and environment
- ・ Literature Review
- ・ Direct Measurement of Export Pollution
- ・ Results
- ・ Summary and Future Plans

[3] 第3 回研究会

- ・ 日 時：2011年10月1日(土) 15:00~18:00
- ・ 会 場：西南コミュニティーセンター2階プロジェクトルーム
- ・ 出席者：12名（報告者2名以外の所属は、九州産業大学1名、九州大学4名、西南学院大学2名、福岡工業大学1名、福岡県環境部1名、福岡県産業廃棄物協会1名）

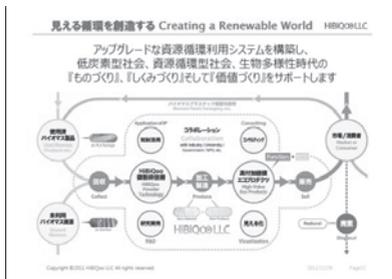
<sup>18</sup> 論文は、ディスカッションペーパーとして公開されている〈<http://www.ip.kyusan-u.ac.jp/keizai-kio/dp52.pdf>〉。

①第1報告：中山裕文氏（九州大学工学研究院）「中国の都市における経済発展と市街地拡大に関する一考察」<sup>19</sup>



- ・ 背景：中国の市街地面積の急拡大
- ・ 成長要因と市街化の関係に関する仮説
- ・ 研究の目的と内容
- ・ 成長会計分析
- ・ 計算結果：TFP 成長率
- ・ まとめ

②第2報告：松田晋太郎氏（環境テクノス（株））「容器包装プラスチックリサイクルの高付加価値化に向けた取り組み」<sup>20</sup>



19 中山ほか（2003）に基づく。

20 <http://hibiqoo.co.jp/>

#### [4] 第4回研究会

- ・日 時：2011年12月10日(土) 15:00～18:00
- ・会 場：西南コミュニティーセンター2階プロジェクトルーム
- ・出席者：11名（報告者2名以外の所属は、九州産業大学1名、九州大学3名、西南学院大学1名、東北大学1名、福岡工業大学1名、福岡県環境部1名、環境テクノス1名）

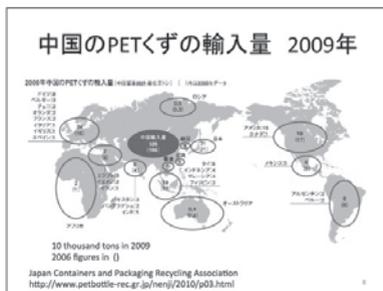
#### ①第1報告：鄭雨宗氏（福岡工業大学社会環境学部）「中国瀋陽における CDM 植林プロジェクトの現状」<sup>21</sup>



- ・京都メカニズムと CDM
- ・CDM 関連組織と承認プロセス
- ・CDM プロジェクトの地域・種類の偏在性
- ・CDM 植林プロジェクトの概要
- ・小規模 CDM 植林（Small-Scale A/R CDM）の現状—中国瀋陽の事例—

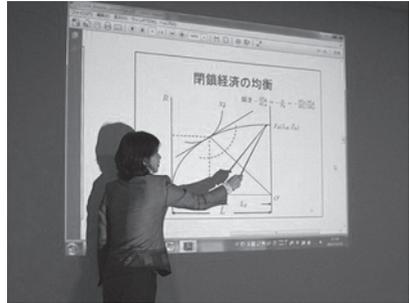
#### ②第2報告：山重芳子氏（成城大学経済学部）「循環資源貿易と輸出税」<sup>22</sup>

- ・はじめに：循環資源貿易と日本の貿易政策
- ・問題意識



21 事例研究は、桜本ほか（2010）に基づく。

- ・モデル
- ・循環資源の貿易の利益
- ・循環資源に対する輸出税／補助金の効果
- ・循環資源に対する最適な貿易政策
- ・まとめ



研究会は2012年度以降も、同じようなペースで開催していく予定である。

フォーラムのML参加者の数からして、報告者に事欠くということはないものの、適宜ゲストスピーカーを招聘して議論するなど、新鮮な雰囲気を維持していきたい。

ただし、研究会であれ講演会であれ、本格的に人を呼ぼうとするならば、当人に少なくとも交通費を、可能であれば謝金も支払うのに十分なファンドを作っておかなければならない。会場は筆者の所属施設であるためいつでも利用できるが、活動資金の確保と用途については今後の課題である。

また、2011年度はその機会がなかったが、修士論文や博士論文を準備している大学院生が、学会やゼミとは違った、リラックスした中で報告できるような場を提供していきたい<sup>23</sup>。

## 5. 映学会 & 講演会と学際交流会

福岡環境学際フォーラムは研究会以外にも、映学会を兼ねた講演会や「環境学際交流会」を企画・調整し、開催につなげている。ただし、前述のように本フォーラムは資金をもっていないため、共催や後援という名目で協力している。

[1]の「映学会&講演会」はそもそも、筆者が学部ゼミ生と輪読していた『環境首都-北九州市』<sup>24</sup>の冒頭で紹介されている映画を一度鑑賞したいと思い、北九州市の

22 論文（英語）は“Export Taxes on Recyclable Materials”というタイトルで、成城大学『経済研究』194号（1-15頁、2011年）に掲載されている〈<http://www.seijo.ac.jp/faeco/orig/about/04.html>〉。

23 実は前述の第2回研究会では当初、福岡大学の大学院生が報告する予定だったが、あいにく学業と重なってしまったため、彼の指導教官が報告を代行した。

24 永田勝也監修，北九州市環境首都研究会編著，日刊工業新聞社，2008年。

知人に電話したことがきっかけで実現した。映画の内容が大変有意義なので、これはゼミで観て終わるのはもったいない、北九州市のキーパーソンをお呼びしてぜひご講演いただく、という流れを作った。

折しも、筆者も関わっている学内の「環境マネジメント委員会」が偶然、勉強会を開催するための予算を持っていたことから、経費の問題は難なくクリアした。

### [1] 映学会 & 講演会「環境モデル都市・北九州市の取り組みを学ぶ」

- ・ 日 時：2011年7月8日(金) 13:00~16:00
- ・ 会 場：西南学院大学チャペル
- ・ 主 催：西南学院大学環境マネジメント委員会  
(学校法人西南学院総務部総務課)
- ・ 後 援：国公立大コンソーシアム・福岡、福岡環境学際フォーラム
- ・ 対 象：コンソーシアム・福岡の学生・教職員、環境問題に関心をもつ一般の方
- ・ 出席者：約50名
- ・ プログラム (写真5~8)：
  - (1) 開会のあいさつ：武井俊詳・西南学院大学副学長(総務担当)
  - (2) 記録映画「青空がほしい」(戸畑区婦人会協議会1965年制作、DVD版)の上映<sup>25</sup>
  - (3) 加藤美佐子氏(北九州市婦人会連絡会会長)ご講演：「公害克服に学ぶ地域活動」(フロアとの対話形式)
  - (4) 櫃本礼二氏(北九州市環境局環境国際戦略室環境国際戦略課長)ご講演：「低炭素社会の実現に向けた環境モデル都市・北九州市の取り組み」
  - (5) 全体の質疑応答
  - (6) まとめ、閉会のあいさつ：岩間徹・西南学院大学大学院法学研究科長

[2]の環境学際交流会は、コンソーシアム・福岡が2010年度まで開催していた市民公開講座を、各校の事情と予算に基づいて「分散開催」する試みの一つである。本稿の作成時点ではまだ開催されていないため、ここでは大枠のみを示し、実績はあらた

---

25 この貴重な映画は、北九州市の(財)アジア女性交流・研究フォーラム〈<http://www.kfaw.or.jp/>〉からお借りした。講演者の選定と併せてご対応くださった、同フォーラム総務課の河野賢司課長と岩波清美氏に感謝申し上げる。

写真5 「青空がほしい」

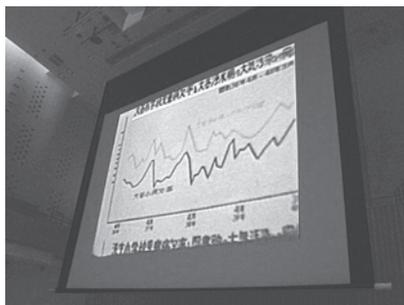


写真6 加藤氏ご講演



写真7 榎本氏ご講演



写真8 質疑応答



めて公表する。

## [2] 西南学院大学環境学際交流会「福岡・九州で提起する持続可能な社会」

- ・日 時：2012年2月22日(水) 13:00~18:00
- ・会 場：西南コミュニティーセンター1階ホール
- ・主 催：西南学院大学（大学院課大学院事務室）
- ・共 催：国公立大コンソーシアム・福岡，福岡環境学際フォーラム，廃棄物資源循環学会九州支部
- ・対 象：環境問題に関心をもつあらゆる方々

## 6. 見学会

「百聞は一見に如かず」という古代中国からの教えは、どのような学問においても当てはまるであろうが、環境問題を勉強しているわれわれにとって、現場を見学するという行為は何よりも重要である。しかし、何でもヴァーチャル化されている昨今、環境問題も同様に「見たつもり」で済ますことが多く、リアルなことを共有しづらい。

みんなで見学に行けば、みんなで同時に物事を理解できるかもしれない。大学であれば、環境問題を語ることで給料をもらっている教員はもちろん、教わる側の学生も積極的に現場に向き、そこに携わっている人たちに直接質問して学ぶ必要がある。欠席した人はもちろん学べないが、出席したとしても自分から何も行動しなければ、何も成果はない。

福岡環境学際フォーラムでは、2011年8月22～23日の2日間、筆者の学部ゼミと九州産業大学経済学部の本間聡氏のゼミに所属する教員と学生が、「環境首都」北九州市に立地する資源循環、低炭素、自然共生に関連する施設を見学した。北九州市には環境関連施設や工場、人材が豊富に存在すること、そして学生同士の親睦を深めることなどを考慮して、今回は1泊2日の日程とした。

また、筆者が某日テレビで「環境修学旅行」のニュースを観たことをヒントに、この見学会を「大学生向け環境修学旅行@北九州」と命名した。北九州市の環境修学旅行（を含む各種修学旅行）は同市産業経済局観光・コンベンション課が誘致しているものであるが<sup>26</sup>、こちらの環境修学旅行は市に「無断で」行ったものである。

以下、その見学コースと写真を紹介する<sup>27</sup>。

---

26 「北九州市修学旅行体験学習プログラムガイドブック」（2011年度改訂版）〈[http://www.kcta.or.jp/gakushu/img/contact/kitakyushu\\_city\\_guidebook2011.pdf](http://www.kcta.or.jp/gakushu/img/contact/kitakyushu_city_guidebook2011.pdf)〉によると、北九州市の自然史・歴史、宇宙、環境、港町と海峡の歴史、産業の現場を学ぶ5つのプログラムが用意されている。

27 この見学会では、北九州市環境局の山田康哲氏（皇后崎環境センター・皇后崎工場次長）、小田真由美氏（環境国際戦略室・アジア低炭素化センター担当課長）、高橋俊道氏（環境未来都市推進室・スマートコミュニティ担当）、ひびき灘開発株式会社の三重野薫氏（響灘事業所長）、河内大輔氏（響灘事業所）、横田亜紀奈氏（総務部開発企画課エコタウンセンター）、NPO法人北九州エコ・サポーターズの永田浩一氏、福岡県立北九州高等学校の井上大輔教諭と生徒3名、環境ミュージアムのスタッフとボランティアに大変お世話になった。この場を借りて感謝申し上げる。

**大学生向け環境修学旅行@北九州**

- ・ 日 時：2011年8月22日(月)～8月23日(火)
- ・ 参加者：西南学院大学経済学部小出ゼミ14名，九州産業大学経済学部本間ゼミ12名，計26名
- ・ 企画調整：松岡浩史氏（一般社団法人資源循環ネットワーク）
- ・ 宿泊等手配：杉本和也氏（(株)IWA ツアー北九州支店）
- ・ 1日目のコース（写真9～12）：
  - ① JR 折尾駅 → ② ごみ焼却施設（皇后崎工場） → ③ 埋立処分場（ひびき灘開発(株)） → ④ 北九州市エコタウンセンター（処分場説明，エコタウン説明） → ⑤ 蛍光管リサイクル工場（(株)ジェイ・リライツ） → ⑥ 家電リサイクル工場（西日本家電リサイクル(株)） → ⑦ プラスチックリサイクル実証研究施設（九州工業大学エコタウン実証研究センター） → ⑧ 北九州ハイツ，泊

写真9 ごみ焼却施設



写真10 埋立処分場



写真11 家電リサイクル工場



写真12 実証研究施設



写真13 環境ミュージアム



写真14 イノベーションギャラリー



写真15 エコハウス



写真16 魚部企画展



・ 2日目のコース（写真13～16）：

- ①北九州ハイツ→②アジア低炭素化センター→③北九州市環境ミュージアム（スマートグリッド等説明）→④北九州イノベーションギャラリー→⑤エコハウス（環境ミュージアム内）→⑥水環境館（北九州高等学校・魚部企画展）→⑦JR小倉駅，解散

2012年度以降も、このような自主的な見学会を実施していく。より多くの大学の学生に参加してもらいたい一方で、交通手段（特に貸切バス）や宿泊、食事の代金をどのように分担するかが課題である。大学からそのような活動に対する何らかの補助があればいいのだが、そのような制度がない場合、あるいはあったとしてもその了承を得るのが面倒な場合は（本学はこれに該当）、あらかじめ策を練っておく必要がある。

## 7. 課 題

本稿では、2011年4月1日に発足した福岡環境学際フォーラムの初年度の活動について、図や写真を多用しながら紹介した。コンソーシアム・福岡の研究助成事業をいわば助走期間として、2011年度からコンソーシアムとともに自力で走り始めた状況であるが、今後どのようなことに留意して走り続けていったらいいかについては、ML参加者のリクエストを踏まえながら、われわれ運営側が適宜決めていかなければならない。

そのためにはまず、この時点で、何ができていて何ができていないかを自己採点してみよう。第3節において、本フォーラムが当初掲げていた活動概要を6点示した。そのうち、(2)検討したいテーマの一部（漂流・漂着ごみ対策、都市と自然の共生、生態系ネットワークの形成）と、(6)共同研究推進の具体的方策に関しては、初年度の活動では十分に議論することができなかった。

(2)の自然共生関連については、前述の環境学際交流会において2名のご講演を予定しているが、もう少し早く、例えば研究会の場で一から学べるような機会を設ければよかった。また、(6)の論文執筆や外部資金獲得につながる「実質」の追求については、フォーラムに参加されている方々の意思や需要を察知し、実現に向けて積極的に話し合うという大切なプロセスを怠っていた。

初年度の反省を踏まえつつ、2012年度も福岡環境学際フォーラムは多方面で活動する。参加者の増加を図るとともに、内容の充実と協力体制の強化に力を入れていく所存である。

## 引用文献

- 小出秀雄 (2010a) 「資源循環・低炭素型都市づくりの学際研究」資料編その1：研究会および研究交流会, 『西南学院大学経済学論集』第45巻第1・2合併号, 51-77頁。
- 小出秀雄 (2010b) 「資源循環・低炭素型都市づくりの学際研究」資料編その2：ヒアリングおよび施設見学, 『西南学院大学経済学論集』第45巻第3号, 113-163頁。
- 小出秀雄 (2011) 「バズのグッズ化の可能性を考察する需給均衡モデル」, 『第22回廃棄物資源循環学会研究発表会講演論文集』, 25-26頁 <[http://www.jstage.jst.go.jp/article/jsmcwm/22/0/13/\\_pdf/-char/ja/](http://www.jstage.jst.go.jp/article/jsmcwm/22/0/13/_pdf/-char/ja/)>。
- 桜本光・吉岡完治・和気洋子・巖網林・加茂貝樹・鄭雨宗・王雪萍・吉武惇二・平湯直子 (2010) 「中国瀋陽市における小規模植林 CDM の概要」, 『三田商学研究』(慶應義塾大学) 53巻2号, 137-148頁 <[http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/download.php?file\\_id=52047](http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/download.php?file_id=52047)>。

中山裕文・高尾彰・島岡隆行・井村秀文（2003）「中国都市の経済成長と市街地拡大に関する一考察」、『環境システム研究論文集』Vol.31，227-233頁〈<http://library.jsce.or.jp/jsce/open/00013/2003/31-0227.pdf>〉。